

トランスジェンダー をいきる (9)

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

中学・高校生(1)

今回から中学・高校生に掛けての記述に入る。嫌いだった読書が好きになった「男読み読書術」の発見、冗談が通じなかった「ひもて」から、「もて」へ、そしてついに立ち現れてきた「第2次性徴と恋愛」について、「自己物語の記述」に従って記述する。

「男読み読書術」の変容(1)

1 はじめに

今回から3回に分けて、読書が嫌いだった私が、どのようにして読書を楽しみ、現在の研究活動にまで活かすことができるようになったのか、「男読み」という概念を生み出し、読書術を構築してきたプロセスについて詳述する。

2 読書は「男らしくない、非行動的行為」

盲学校時代から私は全盲であったので、点字を使用していた。しかし、私は極めて読書が嫌いな子供であった。しかも、「机の上で、点字図書を読む」という行為は、身体が静止している状態であるから、それだけでも非行動的であり、「男らしくない」というレッテルを自らに貼っていた。

夏休みになると、高校生までは毎年のように、「課題図書」が出され、読書感想文を書くことが義務付けられていた。私は読書感想文の宿題が大の苦手であった。そこで、なんとかこの苦手さを克服するために、夏休みの終わりぐらいになると、寝転んで股を開きながら、腹の上に課題図書の点字本を置いてさらさらと点字を触りながら、形だけは「読書を

した」振りをしていた。だから、読んだしりからざるのようにどんどん内容が抜け落ちていき、結局読み終わっても何の感情も沸きあがってこなかったのは言うまでもない。そのような読書の方法を改めるどころか、「男はもともと本を読むような非行動的行為をするものではない」と言わんばかりに、ただ事実を羅列したようなレポート的な読書感想文を提出して、担任の女性教師から叱責されたことも多かった。そればかりか、「なんで「課題図書」なんて窮屈なものがあるんだろう？おまけに、この「課題図書」ときたら、まったく堅い内容か、お涙長大風的情緒的なものばかりじゃないか」と、私は毎年の夏休みに出される「課題図書」への憤慨をどんどん強めていった。

この傾向は、読書感想文だけではなく、国語の教科書に掲載されている小説や伝記などを読む課題でも同じであった。私が一番困惑したのは、国語の時間、担任の女性教師から、ある小説や伝記の内容に対して、「作者は何を考えていたのでしょうか？」という質問をされたときであった。(そんなもん、俺は作者とちやうから分かん)と心では言えたものの、決して声になることはなかった。

また、その小説や伝記の作者の思いや意図に対して、担任の女性教師からの「ここをこのような意図で書かれています」、「彼、彼女（作者のこと）は、このような思いがあって書いているのです」などの解説にも違和感を覚えた。(なんであんた、作者でもないのにそんなことが言えるのさ)この言葉も、心の中では言えたが、決して声になることはなかった。

その背景には、「男はいちいちそういうこと（小説や伝記に関する作者の思いや意図）は言わないもんだ。ましてそのようなことを口にするのは、男として恥ずかしいし、もしうっかりそんなことを言ったら女になってしまう」という恐怖感が、いつも頭の中を支配していた。

3 「男読み」は録音図書から

①録音図書との出会いで「男読み」を発見

小学校5年生から6年生にかけての1980年代前半、『窓際のとっちゃん』は大ベストセラーになった。この本は、著者の黒柳の小学校時代のことが描かれている。録音図書で、しかも彼女自身の肉声で録音されていたこの本を、年配の女性教師に勧められて、図書室で聞いていた。たちまち本の内容と、彼女の肉声に聞きほれてしまった私は、図書室の先生にお願いして、その本をテープにダビングしていただき、週末になると実家に帰省して、家でそれを聞いていた。

あるとき、例によってその録音図書を聞いていたとき、私は何気なく「ながら族」をしながら聞いていることに気づいた。つまり、録音図書を聞きながら体を動かしたり、他のことをしたりしながら聞くことができることを発見した。それは、読書に対して必ずしも非行動的になる必要性はないという気づきを得た瞬間であり、この体験が私のこれまでの

読書に対する印象を徐々に変容させる契機になった。つまり、読書とは、必ずしも点字で読む必要性はないこと、録音図書でも十分に読書が楽しめること、更に読書のスタイルとして、録音図書であれば、必ずしも体を静止した状態で聞かなくてもよいことがわかった。当時、体を静止して点字図書を読むのが苦手だった私は、この録音図書の「必ずしも非行動的になる必要性はない」というメリットに対して「男らしさ」を付与した上で、このような読書方法を「男読み」と名づけた。ただし、先ほどから録音図書を「読む」ではなく、「聞く」と表記しているのは、まだ当時は録音図書のメリットに対して「男読み」と名づけたのが精一杯で、真の意味で録音図書を「男読みした」という実感には至っていなかったからである。

4 女の子への共感性は必要か

中学校 1 年生になっても、毎週実家に帰省し、実家のカセットテープレコーダーで黒柳の自伝を繰り返し聞いて読んでいた。

そんなある日、次のような場面に遭遇し、はっとした。以下、該当箇所を要約する。

時代は、第 2 次世界大戦が始まる少し前。彼女の通っていた小学校の同じクラスに、大江君というやんちゃな男の子がいた。たまたまその日、おさげをして登校した彼女の前に現れ、「あれえ？とっちゃん毛、いつもと違う！」と大声で言った。男の子も気がついてくれたことに嬉しさを感じた彼女は、得意気に彼に「おさげ」を見せた。すると彼は彼女のそばに近づいて、いきなり両手でおさげを持ち、「ああ、今日は疲れたから、ぶら下がるのにちょうどいい。電車のつり革より、楽チンだ！」と言ってぶら下がった。クラスの中で一番体の大きくて太っていた彼が、痩せて小さい彼女のおさげにぶら下がったことで、彼女がよろめいてしりもちをついた。その彼女を立たせようとした彼は、彼女のお下げを持ったまま冗談で「オーエス！オーエス！」と言いながら、運動会の綱引きのようにして引っ張ったことによって、彼女は泣き出し、走って校長室まで行った。校長先生は涙でびしょぬれになった彼女の目の高さまで態勢を低くして、彼女に聞いてみた。彼におさげを引っ張られたことを話した彼女はそこで、校長先生から「泣くなよ。君の髪は、素敵だよ」と慰められたことで、気持ちが治まった。

彼女が校長室を出て、運動場でみんなと遊んでいたとき、彼が頭をかきながら彼女の前にたつて、少し間延びした大きい声で、おさげを引っ張ったことに対して謝罪した。そのとき、彼は次のように言った。「校長先生に叱られたよ。女の子には親切に、だって。女の子は大切に、やさしくしてあげなきゃ、いけないってさ！」

彼女が小学校時代というのは、第 2 次世界大戦開始の少し前のことである。一般家庭でも男の子が優遇され、女の子は冷遇されていた時代、「女の子には、やさしく、親切に」という校長先生の言葉は、彼女にとっては不思議でもあり、嬉しくもあり、また、彼にとっては強いショックだった（黒柳, 1981 pp165-169）。

彼女の通っていた小学校は、身体障害を持った子も多く、1クラスの人数も一般の学校に比べて少なかったようだ。だから、校内の対人関係も密であったことは、校長とのコミュニケーションのあり方を通じて物語っている。

また、この学校の教室は、古くなった電車を教室として利用していた関係上、「電車の教室」と呼んでいたのも、教室内につり革もあったのだろう。彼が彼女のお下げを見て「電車のつり革」を連想したのはそのためであろうと予測できる。

ところで、大江君にお下げを引っ張られて泣いたとつとちゃんが、走って校長室に行った場面について、当時の私は、その彼女の行動を次のように理解した。すなわち、私の中では、いくら彼女が子供であったとはいえ、男の子の前で「お下げ」を得意げに見せたという行為が、まずは、彼女自身の性を簡単に男の子の前でさらしたという認識の下、それを彼に引っ張られたことを泣きながら、大の男の校長に話した、という行為が自業自得である、つまり、彼女自身の性を彼に簡単に売ってしまったにも関わらず、それを買った彼に対して「傷ついた」という感情の下、涙を流しながら校長に話したという行為が、「校長への告げ口」として感じ取った。「女の子は、特に男の子の前で、たとえ髪の毛であろうと得意げに見せるものではない」という思考性が、彼女の行為を性的な行為として受け止めた。自ら性を売っておいて、傷ついたと言って泣いている女性たちは多い。多感な時期であったことも手伝ってか、彼女のこのような行為に共感することはできなかった。

それと同時に、戦前の時代背景を鑑みれば、大の男の校長が、小さな女の子を手厚く扱うという行為に対しても違和感があり、彼女にいたずらをした彼に対する「女の子には優しく、親切に」という訓示にも似た言葉をかけたという行為すら、信じがたいものがあった。この言葉は、「どんなに小さな女の子でも、大事にしなければいけない」という自己への訓示にも似た感触を覚え、「冗談ではない」という反発を持って打ち消したことを、いまさらながら記憶している。その裏には、女の子にうっかり優しく親切にしまうと、彼女から自己の身体の性別に付け込まれて、無理やり女の子にさせられてしまうことへの恐怖感があったからである。

5 終わりに

録音図書によって自ら発見した「男読み」で、徐々に読書に興味を持った私は、中学生から高校生に掛けて、三浦綾子の長編小説『塩狩峠』を録音図書で読んだ。今回は、この『塩狩峠』をベースに、女性への嫌悪と自己の暴力性について詳述する。

うしわかこうじ（立命館大学大学院先端総合学術研究科）